

# 『天草版平家物語』の

## 「なーそ」をめぐる

細川 英雄

「なーそ」という禁止表現の形式が室町末期から江戸初期にかけて日常の口頭語（いわゆる会話文）から姿を消し、江戸中期以降には、和歌などの場合を除いて一般には用いられなくなるといふ事実がある。

その原因として考えられることは、否定の要素が文頭または文中に来るといふ「なーそ」の構造が日本語においてきわめてまれなものであることであり、このことから「なーそ」が日本語の古代語から近代語に至る過程で次第に勢力を失い、消滅していく推移の現象が見られるわけである。

この「なーそ」にとつての衰退への過渡期の資料群の中に『天草版平家物語』（文禄二年へ一五九三）刊がある。そのハビアンの序に「今この平家をば書物のごとくにせず、兩人相對して雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写せよとなり」とあるように、いわば当時の日本語教科書として編集されたものであることはすでによく知られているところであり、同時にその編集意図から当時の口語がかなり反映していると考えられるのできる資料である。ただ在来の『平家物語』をテキストとしてこれを口語抄

訳したものであることから、その言語を考える場合には原拠本の存在を無視することはできない。原拠本の言語と室町末期の話し言葉との差異を比較検討しつつ考察していく必要があることはいうまでもない。

「なーそ」が「ーな」とともに和文系の禁止表現として上代より用いられていることは周知のとおりであるが、室町末期において「なーそ」は口頭語の世界ですでに力を失っており、当時の口語表現の中ではきわめて勢力の弱い表現形式であったのではないかと考えることができる。このことは『天草版平家物語』（以下、『天草版平家』とする）と合本された『伊曾保物語』『金句集』において「なーそ」の例のきわめて少ないことから証されよう。因みに『覚一本平家物語』（以下、覚一本とする）と『天草版平家』との用例数の差は次のとおりである。

表現形式	諸本
なーそ	覚一本 天草版
ーな	43 24 34 16

以上のような歴史的状況において『天草版平家』の「な一そ」は用例数において当時の口語表現としてはかなり勢力を有しているように思われる。衰退への過渡期にある表現形式がなぜ『天草版平家』において勢力を持ち得たのだろうか。原換本との対比を試みつつ、『天草版平家』における「な一そ」のあり方および周辺表現について考えてみたいと思う。

\*

「な一そ」に関して『天草版平家』と寛一本・百二十句本との対応関係を具体的な用例をあげて示すと次のとおりである。

〔天草版平家〕(一)内は、巻数・小題番号・テキストのページ数を示す。以下同じ。

- ① さてもこれほどあまたの人の聞きまらずにさやうのことは  
なほせられそ (na vōxerare[ō]) (巻一・三・一九)
- ② 憎い入道かな！ 何事を奏聞せうぞ、さな言はせそ (ana  
iuaxe[ō]) というて (巻一・三・二五)
- ③ 少将いと泣いそ (itona nai[ō]) 宰相殿のさていざれば、  
命ばかりはさりとともこひうけられうすとなくさめらるれど  
も (巻一・五・三七)
- ④ 宗盛さざらばしな切つそ (xibaxi naqi[so]) というて、そ  
の日は切られなんだ (巻一・二・二三)
- ⑤ これを申せばとて、平家の方人をすると思はせられそ  
(na vomuxerare[ō]) (巻一・四・一二)
- ⑥ 木曾さな言はせそ (jana iuaxe[ō]) と言うて、関をどつと  
つくつたれば (巻三・十三・二二)
- ⑦ これは院方の者ぞ、過ちをすなと、言うたれども、さな言

はせそ (jana iuaxe[ō])、ただ打ち殺せ打ち殺せと言うて (巻  
三・十三・二二)

⑧・⑨ 頼朝きやつに目な見せそ (mena nixe[ō]) 会釈なしそ  
(yexauna xi[ō]) と言はれたれども (巻四・一・二二)

⑩ 郎等が馬を飼ふとて、憎い馬の長食ひかなとて打つたれば、  
平山さうなしそ (sona xi[ō])、平山明日は死なうぞ (巻四・  
七・二六)

七・二六)

⑪ 敵の方にはこれを聞き、音なしそ (votona xi[ō])、ただ敵  
が馬の足疲らかせい矢種を射つくさせいと言うて (巻四・七・  
二六)

⑫ 成田がこよひ言ふやうはいいたう平山殿先がけばやりな召  
されそ (naiqigebayarina mel[are[ō]) (巻四・七・二六)

⑬ 何家でもあれ、物の具なぬがせそ (monoguna nuxaxe[ō])、  
屋島への案内者につれてゆけ (巻四・十六・三二)

⑭ 新中納言具させられて使ひで、せんない仕業かな！ あま  
り罪なつくらせられそ、さればとてしかるべいものでもなし  
とおほせらるれば (tounina toucuraxe rare[ō]) (巻四・十八・  
三四)

⑮ 善知識の上人もさなおぼしめされそ (ana voboxime[are[ō])、  
最後のおんありさまをこらうせられうするにつけても、たが  
ひにお心にかからうず (巻四・二一・三六)

⑯ この文を見させらるれば、別のおこともこぞないお心苦  
しうなおぼしめしそ (vooocoroguruxv navoboxime[ō])、いつ  
しかみなみな恋しうこそと世にもおとなしう書かれたれば  
(巻四・二六・三八)

- 〔覚一本〕（ ）内はテキストの巻数・ページ数を示す。以下同じ。
- ① あなあさまし。人あまた承候ぬ（上一二四）
  - ② 何事をか奏すべき。さないはせそとて（上一五四）
  - ③ 少将いたうな歎ひそ。宰相さておはずれば（上一六五）
  - ④ （該当文なし）
  - ⑤ 平家のかたうどやおぼしめされ候らん（上一三〇五）
  - ⑥ 木曾さないはせそとて時をどとつくる（下一五四）
  - ⑦ さないはせそ。院宣であるに、たゞ打ころせく（下一五五）
  - ⑧・⑨ 兵衛佐しやつにめな見せそ。あひしらぬなせそ（下一六一）
  - ⑩ かうなせそ、其馬の名こりもこよひばかりぞ（下一〇〇）
  - ⑪ よし、音なせそ。敵に馬の足をつからかさせよ（下一〇二）
  - ⑫ いたう、平山殿、さきがけはやりなし給ひそ（下一〇二）
  - ⑬ なに家でもあらばあれ、物の具なぬがせそ（下一〇七）
  - ⑭ 能登殿、いたう罪なつくり給ひそ（下一三〇）
  - ⑮ いまはとかくおぼしめすべからず（下一三九）
  - ⑯ （該当文なし）
  - ⑰ 〔百二十句本〕（ ）はテキストのページ数を示す。以下同じ。
  - ⑱ 大ニ驚キ有ルヘツモ候ハズ既ニ人数ヲ承候ヒス（五三三）
  - ⑳ 憎奴原カナサテ云セソトテ（九三）
  - ㉑ 少将痛ナ歎キノ宰相殿ノサテモヲワシケレバ（一〇六）
  - ㉒ 右大将サラハシバシナキリソトテ（二五五）
  - ㉓ 平家ノ方人スルト思召レ候マジ（二六四）
  - ㉔ （欠巻）
  - ㉕ （欠巻）

- ⑧・⑨ （欠巻）
- ⑩ 平山サウナセソ季重明日ハ死ナンソ（五二二）
  - ⑪ 音ナセソ只敵ガ馬ノ足疲カサセヨ（五二四）
  - ⑫ 痛ウ平山殿魁ケハヤリナヲ玉ヒソ（五二四）
  - ⑬ 何家ニテモアレ物具ナ脱セソ（六三九）
  - ⑭ 詮ナキ熊カナ余ニ罪ナ作り玉ヒソ（六六八）
  - ⑮ 善知識ノ上人モサナ思召レ候ヒソ（七二四）
  - ⑯ 別ノ御事候ハス御心苦シクナ思召レソ（七五二）
- 以上の三本の用例を整理すると次のようになる（数字は用例数を示す）。
- 〔覚一本〕 (天草版)
- |      |    |   |     |    |
|------|----|---|-----|----|
| な一そ  | 11 | ↓ | な一そ | 16 |
| べからず | 1  |   |     |    |
| 他の表現 | 2  | ↓ | な一そ | 16 |
| 対応せず | 2  |   |     |    |
- 〔百二十句本〕 (天草版)
- |       |    |   |     |    |
|-------|----|---|-----|----|
| ナ一ソ   | 10 | ↓ | な一そ | 16 |
| マジ    | 1  |   |     |    |
| ベモ候ハズ | 1  | ↓ | な一そ | 16 |
| 対応せず  | 4  |   |     |    |
- 右の表から、『天草版平家』一六例のうち覚一本では一一例、百二十句本では一〇例が対応し、二本における「べからず」・「べうも候はず」・「まじ」の各一例が「な一そ」に置き換えられていることがわかる。

この状況から判断すると、『天草版平家』の「な―そ」は、原  
撰本としての覚一本あるいは百二十句本の表現形式をほぼ踏襲し  
た形で成立しているといえそうであるが、もちろん、わずかなが  
らも「べからず」等の諸表現をとりこんでいるのであるから、す  
べて原撰本の踏襲であるとはできない。

では、覚一・百二十句の両本で「な―そ」以外の表現形式であ  
った「べからず」・「べうも候はず」・「まじ」の諸表現は、『天草  
版平家』においてどのような位置を占めているのであろうか。

「べからず」は、覚一本に八一例見られるのに対し、『天草版平  
家』には七例見えるのみである。覚一本の「べからず」八一例  
のうち禁止の意を表す例は五五例をかぞえ、しかも終止用法に集  
中している点を指摘できる。

○ 是は汝がもとゞりと思ふべからず。主のもとゞりと思ふべ

し(覚一本・巻一・殿下乗合)

○ 相構で、衆徒は狼籍をいたすとも、汝等はいたすべからず。

物の具なせそ。弓箭な帯しそ(同・巻五・奈良炎上)

一方、『天草版平家』では、終止形四例が禁止の意をあらわし  
ているに過ぎず、しかもこの四例のうち二例は序の文に、他の二  
例は故事引用の文において用いられており、四例がいずれもきわ  
めて固定化した用法であることを指摘できる。

○ 賢きより賢からんとなれば、その手だてを妾へ、一隅を守

るべからず(mamoru becarazu)(天草版平家・序)

○ 君君たらずと言ふとも、臣もつて臣たらずんば、あるべか

らず(aru becarazu)(同・巻一・六)

右の例から明らかのように、『天草版平家』において「べから

ず」は、きわめて文章語的な性格の語として用いられていると判  
断することができる。

次に「べうも候はず」であるが、『天草版平家』には「べうも  
なし(ない)」の形で九例用いられている。

○ 義経院へ奏聞せられたれば、あるべうもなし(aru beōmo  
nashi)・頼朝に見せてのちこそ、法師にもなさうずれとあつて、

御許されなかつたれば(天草版平家・巻四・一一)

百二十句本①「有ルヘフモ候ハズ」は、「そのようなことはあ  
つてはならない」の意で、場面上で禁止を表わしているが、  
『天草版平家』の九例中には禁止の意(あるいは二人称の動作に  
つく)の用法は見られず、当時「べうもなし(ない)」の表現形  
式が禁止の意として用いられることはあまりなかったのではない  
かとも思われる。

「まじ」は、『天草版平家』においてすでに勢力を失った語であ  
る。覚一本では「まい」の形は見られず、「まじい」も「まじき」  
の音便形として連体形のみあらわれているのに対し、『天草版  
平家』では終止形・連体形において「まじい」・「まい」両語形が  
拮抗しており、本来の「まじ」はほとんど見られなくなっている。  
しかも「まじい」・「まい」の用例は終止・連体形に集中し、いわ  
ゆる不変化助動詞として辞の性格をより強めていく過程が二本の  
比較によって明確になっている。

『天草版平家』における「まじ」・「まじい」・「まい」の、覚一  
本・百二十句本との対応関係をまとめて整理すると、次のように  
なる。

〔覚一本〕

〔天草版〕

べからず 3 ↓ まじい (止) 2、まじい (体) 1

まじき 4 ↓ まじい (体) 3、まい (体) 1

まじう候 1 ↓ まじ (止) 1

まじかりける 1 ↓ まじい (体) 1

〔百二十句本〕

〔天草版〕

べカラズ 3 ↓ まじい (体) 2、まじい (止) 1

マジキ 4 ↓ まじい (体) 3、まい (体) 1

マジウ候 1 ↓ まじ (止) 1

〔天草版〕

○ 詮は、ただ重盛が首を召されよかし、院中をも守護し奉らず、院参のお供をもつかまつるまじい (fencamaturu maji)

(卷一・六・四八)

○ いかにか妓王御前、天が下に住まうずるかぎりは、ともかうも清盛のおほせをそむくまい (fomgunarai) ことごとそあれ

(卷二・一・九九)

○ 夜な夜な近習の人々この一門を滅ぼいて、天下を乱らさうずると企てらるるによつて、いちいちに召し捕つて尋ね沙汰

いたさうずる…それをば君もしろしめされまじ (xiroxime)

aremai) と申せと言はれたれば (卷一・三・三三)

○ 季貞帰つてこの由を申せば、あはれ人の子をば持つまじい (motomajii) ものぢや、わが子の縁に結ばはれぬにおいて

は、これほどまで心をばくだくまじい (cudagu-majii) ものを

をと言つていでられた (卷一・五・四〇)

〔覚一本〕

○ 院参の御供をも仕るべからず (上一七四)

○ ともかうも入道殿の仰せをは背まじき事にてあるぞよと (上一〇〇)

○ それをば君もしろしめさそまじう候 (上一五二)

○ あはれ人の子をばもつまじかりける物かな (上一六七)

〔天草版〕

○ 義経怒らせられて鎌倉を出て西国へ向はうずるともがらは、義経が命をそむくまじい (fomgunarai) 儀ぞ…それに子細を

申さう人は急いで鎌倉へ帰り上られい (卷四・十七・三三六)

○ 頼朝怒つて、さては御辺も義経と同心な? 今日よりして

頼朝兄弟の儀あるまじい (arumajii) 鎌倉中にもかなふまじい

(canomajii) とおほせらるれば (卷四・二四・三七九)

○ まことに人は世にあるとともすまじい (umajii) をし、言

ふまじい (yumajii) ことを言はば、やうやう思慮生ずること

ぢや (卷二・三・一一五)

○ それをば君もしろしめされまじ (xiroxime) are majii) と申

せと言はれたれば (卷一・三・三三)

〔百二十句本〕

○ 義経カ命ヲ背ヘカラス (六四八)

○ 鎌倉中ニモヲワスヘカラス (七四一)

○ 去レバ人世ニ有レハトテスマジキヲシ云マジキヲ年ハ

ヨク〳〵思慮アルヘキフ世 (二五六)

○ 君モシロシメサレマシヲ候ト申セト (九一)

「まじ」の活用形内の変動はともかくとして、「べからず」から

「まじい」への推移は注目すべき現象ではなからうか。すでに述べたように、「べからず」は口語として衰退の方向へと移行しており、その「べからず」の衰退にとつてかわる形で、より口語的な「まじい」・「まい」が抬頭してくるさまが右の図・用例によく示されている。そして、「まじ」・「まじい」・「まい」の中でも、本来の「まじ」は『天草版平家』において用いられることが少なく、当時としてはすでに文語的色彩を帯びた語になっていたことが想像される。

以上のように、『天草版平家』の「なーそ」のうち、原拠本に「なーそ」以外の表現形式が用いられていたものの『天草版平家』での用法を見てみると、いずれもかなり限定された範囲の中でしか使用されない形式であることがわかる。

『天草版平家』における「なーそ」は、原拠本の「なーそ」をほぼ踏襲する形であらわれつつ、一方で限定された文章語的諸表現を担つて成立していることが明らかになったが、このような『天草版平家』の「なーそ」が成立することを考えるためには、原拠本の強い影響もさることながら、当時の日本語教科書としての性格を充分考慮に入れる必要があるのではあるまいか。つまり、『天草版平家』において教科書としての言語的な統合・整理のおこなわれたであろうことは想像に難くなく、「なーそ」が従来の「なーそ」を踏襲しつつ文語的な禁止表現をも取り込んで、禁止表現中の典型の一つとして用いられたのではなからうかということである。このことを「ーな」との比較において検討してみることにする。

『天草版平家』の「ーな」における寛一本・百二十句本との対応関係をまとめて整理すると次のとおりである。

	寛一本	天草版	
	19	34	
べからず	10	1	↓
なーそ	1		
対応せず	4	4	
	(百二十句本)	(天草版)	
ーな	19	34	
べからず	9	1	↓
マジ	1		
マジキ	1	4	
対応せず	4		
	(天草版)		
○	しやつが首左右なう切るな (qinuna)、よくよくいまして	おけと、言はれたれば (巻一・三・二七)	
○	さうあればよそのこととはおほしめすな (voboximejuna)	(巻一・一〇・七四)	
○	船どもかがりたいて敵に船数を見するな (mifuruna) (巻四・一六・三二八)		
	(寛一本)		
○	しやつが頸左右なうきるな (上一五五)		
○	さればよその事とおほすべからず (上一二四)		
○	をののの船には籥なともひそ (下三〇六)		

〔天草版〕

○ 清盛少将をばこのうちへは入れらるるな (ireruruna) と

言はるるによつて (巻一・五・三八)

○ 梶原申したは・義経もおそろしいお人でござる、うちとけ

させられな (vehitoge]axerarena) と申せば (巻四・二三・

三六九)

〔百二十句本〕

○ 奴力頸サウナウ斬ヘカラス (九四)

○ 少将ヲハ此ノ内チヘハ叶マシト (一〇六)

○ 判官殿毛怖シキ人ニテ御渡セ玉ヒ候モノ打解サセ玉ヒテハ

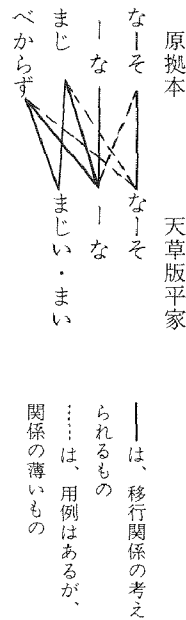
叶マシキ由ヲ申ケレハ (七二七)

右の図・用例から明らかなように、『天草版平家』の「いな」は、覚一本・百二十句本の「べからず」・「まじ」・「な<sup>ー</sup>そ」等を吸収する形で成立している。その用例分布の割合から見ても「いな」の成立の仕方が「な<sup>ー</sup>そ」の場合とはかなり異なっていることが指摘できるだろう。つまり、「いな」の場合は、原拠本の「いな」にその半数を負つてはいるけれども、むしろ勢力をさらに拡張するかのようになり、「べからず」・「まじ」・「な<sup>ー</sup>そ」等の諸表現も取り込んでいる。また、わずかに一例に過ぎないが、「いな」が「な<sup>ー</sup>そ」に置き換えられているにも目を向けておく必要がある。「な<sup>ー</sup>そ」が「いな」に置き換えられた例は存在しないということである。

すなわち『天草版平家』の「な<sup>ー</sup>そ」が覚一本・百二十句本の形をほぼ踏襲し、ほとんど勢力を拡張する力を持たなかったのに対し、「いな」は口語の中での発達の状態を反映し、かなり多く

の諸表現を吸収して成立している。それは、室町末期の口頭語としての「な<sup>ー</sup>そ」と「いな」との用いられ方の差が如実にあらわれたものであり、当時の日本語教科書として「いな」の口語性が重視されたことを示すものではなからうか。

今回とりあげた諸語について原拠本から『天草版平家』への流れを考えてみると、およそ次のようになる。



右の表から、「べからず」の分裂、「な<sup>ー</sup>そ」の固定化、「いな」の発達などの推移をおおまかに捉えることができる。加えて現代語では「まい」の形での禁止表現はほとんど見られず、否定推量としての「まい」も「ないだろう」などの表現に言い換えられる傾向にある。このことは、この禁止の「まい」も「いな」の中に吸収・統一されていく方向にあったことが推測される。

室町末期に、日本語教科書として編集された『天草版平家』が、原拠本とのかかわりの中で一四世紀末の言語を明確に反映させてつ息づいているさまを「な<sup>ー</sup>そ」およびその周辺の表現を取り上げつつ、広く表現史の問題として捉えるための一視点として考えてみた。御教示いただければ幸いです。

\*テキストには『天草版平家物語』(勉誠社文庫・影印)・『平家物語』上・下 日本古典文学大系(岩波書店)・百二十句本平家

「物語」(斯道文庫古典叢刊之二・影印)を使用し、『天草版平家』  
 翻字には、亀井高孝版田雪子翻字『キリシタン抄平家物語』(吉川弘  
 文館)を参考にした。

注(1)大坪併治「禁止表現法史」(『国語国文』5-10 昭10・9)／

細川英雄「禁止表現の変遷―「な」「なそ」「な」について―」(『国文学研究』48 昭47・10)参照

(2)亀井高孝・阪田雪子翻字『キリシタン抄平家物語』(吉川弘文館)  
 解説／清瀬良一「天草版平家物語の原拠覚書」(『国文学攷』33  
 昭39・3)／同「天草版平家物語の本文批判―本文の誤謬・欠陥  
 が原拠本に起因する場合―」(『文教国文学』7 昭53・12)参照

(3)百二十句本の用例中「憎奴原カナ・サテ云セソトテ」(巻一・  
 一三・〇〇)の例がある。あるいは「―そ」の形式かとも考えら  
 れるが、諸本との比較により一応「さな云せそ」としておく。

(4)「じ」「まじ」「べからず」の覚一本・天草版平家における分  
 布状況は下記の表のとおり。

上村良作「天草版平家物語における助動詞「まじい」「まい」」

(『今泉博士古稀記念国語学論叢』昭48)

(5)小林賢次「院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラズ」(『言  
 語と文芸』84 昭52・6)／同「院政・鎌倉時代における否定推  
 量・否定意志の表現―ジ・マジ・ベカラズの周辺―」(『香川大学  
 教育学部研究報告』I-43 昭52・10)／細川英雄「天草版平  
 家物語」における否定の表現形式の用法について(上・下)」

(『信州大学教育学部紀要』41・42 昭54・11、昭55・3)参照

(6)小池清治「天草本平家物語における教本的換言法について」

計	連体形				終止形				連用形			体止		活用形						
	已	連	体	形	已	連	体	形	終止形	連用形	体	止	表現	諸本						
	べからね	べからざる	べからぬ	べからず	まじけれ	まじかん	まい	まじい	まじ	まじ	まじ	まじ	じ	じ	人称	諸本				
63				1	1		4	4		5	1	1		46	一人称	覚一本				
68	1	2		52	1		1	8			2	1			二人称					
204		1		24	8	1	2	21		50	2	2	9	84	三人称					
335	1	3	0	77	10	1	0	7	33	0	0	0	55	4	4	1	9	130	計	
61					2		12	7	1	16	18	1			4			4	一人称	天草版
14				4			1	5				3	1						二人称	
117			3		2		6	7	2	49	40			1	7				三人称	
192	0	0	3	4	4	0	19	19	0	3	65	61	2	0	0	0	1	11	計	



〔フェリス女学院大学紀要〕 8 昭48・7)  
(7) 鎌田広夫 「ないだらう」考」〔人文論究〕 23 昭38・5)

\* 本稿は、「近代語学会」(昭54・12・8 昭和女子大学)での  
口頭発表の一部である。御出席の方々にはさまざまな御教示  
をいただいた。記して謝意を表したい。